

Hara Museum of Contemporary Art

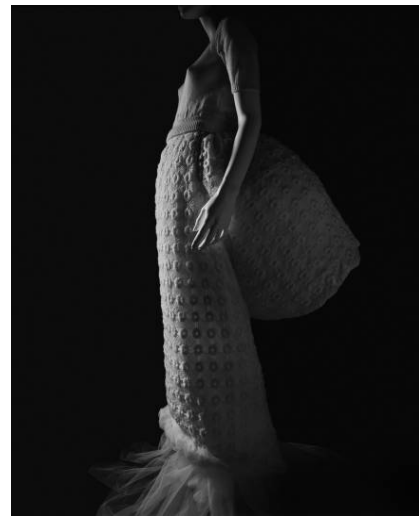
Press Release 2012/01/25

杉本博司 ハダカから被服へ

2012年3月31日[土] - 7月1日[日] 原美術館 [東京・品川]

「人類の衣服の歴史は人類の歴史そのものと同じほど古い」(杉本博司)

人類の始まりから20世紀まで、人間と衣服の関係を杉本博司がカメラの眼を通して探る。写真作品は、ガブリエル シャネル、イヴ サンローラン、川久保玲など、20世紀を代表するファッションを彫刻的にとらえた「スタイアライズド スカルプチャー」シリーズを中心に、「ジオラマ」や「肖像写真」も織り交ぜる。さらに自ら演出やデザインを手がけた文楽の人形や能楽の装束ほかも展示し、杉本独自の視点で「装う」ことの意味を問う。



原美術館(東京都品川区北品川4-7-25)にて、写真家・現代美術作家、杉本博司の個展を開催します。

杉本博司は、写真というメディアの本質を探究し、人間と世界の意味を照射する数々の写真作品で国際的に高い評価を受けています。日本語では「Photography」を「写真」と表記しているものの、デジタルメディア時代の今、写真画像の加工や修正はコンピュータ上で簡単にできるようになりました。しかし、杉本博司はデジタル時代以前に写真は虚構である事を見抜き、カメラの眼で世界をとらえる事によって、人間の眼の性(さが)を研究してきました。その精緻なモノクロームのプリントは透徹した思考と卓越した技術に裏打ちされ、他の追随を許さないイメージが鑑賞者を魅了します。

この展覧会は、ガブリエル シャネル、イヴ サンローラン、川久保玲など、20世紀を代表するデザイナーによるファッションの数々を撮影した「スタイアライズド スカルプチャー」シリーズを中心に構成されます。「人類の衣服の歴史は人類の歴史そのものと同じほど古い」ことに着目し、「人体とそれを包む人工皮膚を近代彫刻として見る」という視点から制作したこのシリーズは、生身の身体を持ったモデルではなく、慎重に選んだマネキンを使って撮影されています。これは、人間にとっての衣服の意味、人間と衣服の関係を掘り下げる示唆的なシリーズとなっています。

このシリーズに加えて、他のシリーズ(「ジオラマ」および「肖像写真」)から選んだ写真作品が「ハダカから被服へ」という人類史的な軸を浮き上がらせます。さらに、杉本博司自身が演出を手がけた文楽の人形、デザインを手がけた能楽の装束、これまで収集した美術工芸品も織り込み、人間の身体と「装う」ことの意味を、杉本博司ならではの視点で読み解きます。

(左・[図版1])「類人」1994年 ゼラチンシルバークラウドプリント 64.7 x 89.5 cm ©Hiroshi Sugimoto / Courtesy of Gallery Koyanagi (右・[図版2])「スタイアライズド スカルプチャー 003 [川久保玲 1995]」2007年 衣装所蔵: 公益財団法人京都服飾文化研究財団 ゼラチンシルバークラウドプリント 149.2 x 119.4 cm ©Hiroshi Sugimoto / Courtesy of Gallery Koyanagi

【開催要項】

展覧会名 杉本博司 ハダカから被服へ (英題 Hiroshi Sugimoto: From naked to clothed)
会期 2012年3月31日[土]-7月1日[日]
会場 原美術館 東京都品川区北品川4-7-25 〒140-0001
Tel 03-3445-0651(代表) Fax 03-3473-0104(代表) E-mail info@haramuseum.or.jp
ウェブサイト <http://www.haramuseum.or.jp> 携帯サイト <http://mobile.haramuseum.or.jp>
ブログ <http://www.art-it.asia/u/HaraMuseum>
Twitter <http://twitter.com/haramuseum> (アカウント名 @haramuseum)
主催・会場 原美術館
特別協賛 Dom Pérignon
協力 公益財団法人京都服飾文化研究財団、公益財団法人小田原文化財団、ギャラリー小柳
出品作品数 「スタイアライズド スカルプチャー」シリーズ 15点を中心に約30点を予定
開館時間 11:00 am-5:00 pm (水曜は8:00 pmまで/入館は閉館時刻の30分前まで)
休館日 月曜日(祝日にあたる4月30日は開館)、5月1日
入館料 一般1,000円、大高生700円、小中生500円/原美術館メンバーは無料、学期中の土曜日は小中高生の入館無料/20名以上の団体は1人100円引
交通案内 JR「品川駅」高輪口より徒歩15分/タクシー5分/都営バス「反96」系統「御殿山」停留所下車、徒歩3分。
関連イベント [対談] 杉本博司×深井晃子(京都服飾文化研究財団理事/チーフキュレーター)
4月1日[日] 2:30-4:00 pm [原美術館ザホールにて 予約制 参加費 一般2,000円(入館料込)、原美術館メンバーおよび同伴者1名様まで1,000円 受付開始日 3月1日[木]11:00~ 先着順 ※ご予約はE-mailのみで承ります。info@haramuseum.or.jp ※お一人あたり2名様までお申込み可。詳細は当館ウェブサイト、ブログ、ツイッターにてご確認ください。]

*日曜・祝日には当館学芸員によるギャラリーガイドを行ないません。(2:30pmより30分程度)

*[カフェ ダール特別メニュー] 水曜夜限定「ドン ペリニヨン イヴニング」ドン ペリニヨン ヴィンテージ 2003をグラスでお楽しみ頂けるお二人様用特別メニュー。一口サイズのお料理とともにどうぞ。[原美術館内カフェ ダールにて 予約制 2名で税込5,250円(入館料別) 受付開始日 3月31日[土]11:00~ 各日限定5組10名様 ※ご予約は電話のみで承ります。03-5423-1609 (カフェ直通)。詳細はお問い合わせください。]

**H A R A
MUSEUM**

Dom Pérignon
♥

【主な展示内容】

■写真作品 すべてゼラチンシルバークラウドプリント(銀塩写真、モノクローム)

「スタイアライズド スカルプチャー」(Stylized Sculpture) 15点

本展の中心であり、まさに衣服(と身体)を主題にしたシリーズ。マドレーヌ ヴィオネ、ガブリエル シャネル、クリストバル バレンシアガ、イヴ サンローラン、ジョン ガリアーノ、三宅一生、山本耀司、川久保玲など、20世紀を代表するデザイナーによるファッション(公益財団法人京都服飾文化研究財団所蔵)を撮影したもの。「人体とそれを包む人工皮膚を近代彫刻として見る」という視点がシリーズタイトルに込められている。古いものでは1920年代のデザインもあり、人の体型も時代によって異なるため、生身のモデルではなく、慎重に選んだマネキンを使って撮影された。それによってデザインされた衣服の本来の美しさを引き出そうとしている。

「ジオラマ」(Dioramas)および「肖像写真」(Portraits)から 11点

「ジオラマ」はニューヨーク自然史博物館の、「肖像写真」はマダム タッソー 蠟人形館の展示を撮影したもの。前者では古代の環境や生物が、後者では歴史上の偉人や現代の著名人が精緻に再現されている。カメラの眼を通すことによって、偽物でありながら時間を超越した永遠の存在にも感じられるイメージは、杉本博司の写真作品の特色を端的に表している。「ジオラマ」は杉本博司が注目されるきっかけとなった初期のシリーズでもある。

■その他

文楽人形/杉本博司が演出した「杉本文楽會根崎心中付けたり観音廻り」(2011年)のために制作したもの
能楽の装束/杉本博司が美術を手がけた「神秘域(かみひそみいき)」(2011年)で野村萬斎が着用したもの
杉本博司収集の美術工芸品など

【展覧会に寄せて／作家の言葉】

ハダカから被服へ

なぜ私達人間は服を着るのだろう。私達は装い装う。私は私以外の何者かになりたい。いや、私であるためには、私は私を装わなくてはならない。現代文明のただ中では、裸は許されない。私は裸の自分を羞じる。私は着せ替え人形だ。毎日服を着て、私は私を演出する。私が裸でいられる短い時間、それは入浴の時と、子孫繁栄の時。私が子孫繁栄の時へと導かれるためには、夥しい擬態と演出が必要だ。私が私を裸の恍惚へと導くためには、夥しい数の服が必要とされる。

その短い子孫繁栄の時間が過ぎ去っても、私は私の装いを続けなければならない。他人はあなたの装いを見て、あなたを認知する。それがあにしろ、ないにしろ、私は私の知性を装い、私の資産を装い、私の嗜好を装う。装いは服だけではない。私の表情、私の仕草、私の眼の翳り、それらは自動的にあなたの着るものと連動している。あなたの意志とは係わりなく、あなたの着る服が、あなたの表情を決める。あなたは、あなたの服の気持ちになる。顔というあなたの仮面は、あなたの服に最もふさわしい仮面を選ぶ。

大昔、私達が裸で暮らしていた頃、私達は幸せだった。

杉本博司

【関連情報】

2011年国際エミー賞アート番組部門にノミネートされたドキュメンタリー映画「はじまりの記憶 杉本博司」が、本展スタートと同じく2012年3月31日[土]よりシアター・イメージフォーラム(東京都渋谷区)にてロードショー。詳しくはこちら <http://sugimoto-movie.com>

【作家略歴】

杉本博司 すぎもと ひろし

東京、下町に生まれる。立教大学経済学部卒業後渡米、ロサンジェルスのアートセンター カレッジ オブ デザイン卒業後74年よりニューヨーク在住。現代美術作家として、世界各地の美術館で個展を開催する。2009年建築設計事務所「新素材研究所」を東京に開設、静岡県長泉町に IZU PHOTO MUSEUM を設計する。2011年、主宰する小田原文化財団が、公益法人として認可され、財団の活動として「杉本文楽曾根崎心中付けたり観音廻り」を神奈川芸術劇場にて公演する。1988年、毎日芸術賞、2000年、パーソンズ スクール オブ デザイン、ニューヨーク、名誉博士号、2009年、高松宮殿下記念世界文化賞、2010年、紫綬褒章。主な著書に『歴史の歴史』(新素材研究所)、『空間感』(マガジンハウス)、『苔のむすまで』、『現な像』(新潮社)がある。

<http://www.sugimotohiroshi.com>

【主な作品】

杉本博司が脚光を浴びたのは1970年代後半に着手した「ジオラマ」(上記参照)と「劇場」のシリーズによってである。長時間露光によってスクリーンを満たす映画一本分の光をとらえた「劇場」シリーズは、人間にとっての「見る」ことの本質を可視化した。「原始人の見ていた風景を、現代人も同じように見ることは可能か」という問いに発し、世界中の海と空を同じ構図で撮り続けた「海景」シリーズは1980年に始まり、この3シリーズによって杉本博司は国際的な評価を確立した。その後も、レンズの焦点をあえて外した撮影でモダニズム建築のフォルムのエッセンスを抽出した「建築」、カメラを通さず直接光をフィルムに焼き付け、プリントした「放電場」など、精力的に多彩な写真作品を制作している。また、2000年代に入って建築の設計や文楽・能などの舞台活動にも活躍の場を広げており、その一端は本展の内容にもうかがえる。

【杉本博司と原美術館／ハラ ミュージアム アーク】

本展は原美術館で初めての杉本博司展であるが、原美術館の別館ハラ ミュージアム アーク(群馬県渋川市に1988年開館、磯崎新設計)では、1996年に個展を開催している。これはニューヨークのメトロポリタン美術館で開催した個展をハラ ミュージアム アークの空間に合わせて再構成したもので、48点からなる長大なシリーズ「千体仏(後に「仏の海」)」の日本での初公開となった。京都・三十三間堂に並ぶ千体千手観音像を主題に、観念(信仰)の具現化としての仏像をカメラの眼で切り取ったこのシリーズは、原美術館のコレクションに加わった。当館ではそのほかに「海景」シリーズも7点を所蔵している。

【広報用図版】

1 ページに掲載の図版が本展のメインビジュアルとなります。

掲載時には必ずクレジットを表記してください(スペースに制約のある場合、素材技法、サイズは省略可能です)。トリミング、文字乗せはご遠慮ください。



[図版 3]



[図版 4]

[図版 3]

「スタイアライズド スカルプチャー 008 [イヴ・サンローラン 1965]」2007年
衣装所蔵：公益財団法人京都服飾文化研究財団 ゼラチンシルバープリント 149.2 x 119.4 cm
©Hiroshi Sugimoto / Courtesy of Gallery Koyanagi

[図版 4]

「スタイアライズド スカルプチャー 011 [ジョン・ガリアーノ 1997]」2007年
衣装所蔵：公益財団法人京都服飾文化研究財団 ゼラチンシルバープリント 149.2 x 119.4 cm
©Hiroshi Sugimoto / Courtesy of Gallery Koyanagi

取材・図版提供などのお問い合わせ先：

原美術館 広報 松浦、野田 (担当学芸員 安田)[Tel 03-3280-0679 E-mail press@haramuseum.or.jp]

(いずれも広報直通/掲載時には代表番号・アドレスをお用いください)